

## 折々の銘 14

### 【弱法師】よろぼし

謡曲『弱法師』は観世元雅の代表作です。「よろぼし」とも「よろぼうし」とも読みます。観世元雅は世阿弥の息子で、父・祖父同様才能に恵まれましたが、様々な不運に見舞われ人生を終えた人です。

『弱法師』は摂津国四天王寺を舞台とします。河内国の高安通俊は他人の讒言に惑わされて息子の俊徳丸を追放してしまいます。しかし時を経て後悔し、天王寺で俊徳丸のために七日間の施行をおこないます。施行の最終日に当たる彼岸の中日、弱法師と呼ばれる盲目の乞食が天王寺に現われます。弱法師は梅の香に心を通わし、乞食ながらどこか優雅さを具えた青年です。通俊は弱法師に施しをしますが、この乞食こそ我が子俊徳丸と気がつき、人目をはばかり夜になって父と名乗り郷里へ連れ立って帰るとい話です。

この曲も私が再三採り上げている親子再会譚のひとつです。(折々の銘 16・17・32・33 参照)

『弱法師』は事の起こりが他人の讒言による不和・勘当と極めて具体的に書かれているところが特徴です。

謡曲には主題を引き立たせる景物があるものです。『弱法師』の場合梅であることは明らかでしょう。

仮に茶杓の銘が「弱法師」ならば、合わせる道具は何がよいのでしょうか。梅の意匠は豊富に見られますが、近すぎたり、重ならないようにするのは難しいですね。

茶道具の銘で『弱法師』といえば宗旦作の茶杓が思い浮かびますね。

彼の代表作のひとつで、現在は根津美術館にあります。細身で弱々しく飾り気のない姿はみごとに銘に適っています。

この銘には宗旦のいかなる思いがこめられているのでしょうか。

利休の孫に当たる宗旦(1578-1658)には五人の子がいました。文禄3年(1594)利休切腹の痛手から千家再興を許され、三玄院春園のもとで修行していた宗旦は還俗して十代で二子を設けました。後の閑翁宗拙と一翁宗守です。妻と死別して、後妻を迎え、後の江岑宗左、くれ、仙叟宗室の三子を更に設けます。長女くれは久田宗利の妻となります。

一翁宗守・江岑宗左・仙叟宗室の三人は三千家の祖であることは皆様ご存知のとおりです。

自らは頑なに仕官を拒む一方で、宗旦は息子たちの仕官先を積極的に求め、働きかけていたことはよく知られた話です。

父の努力の甲斐あって、宗拙は前田家に、宗左は紀州徳川家に仕官が決まりました。宗旦 65 歳のときです。

しかし、どうしたことか宗拙は幾度職に付いても一年足らずで辞してしまいます。

父宗旦は根気よく宗拙の立身を図ってきましたがついに堪忍袋の緒が…。宗拙は勘当されてしまいます。その後、宗拙は鷹ヶ峰の本阿弥家や医師の野間家の世話になったようです。

晩年、親子は和解したとも伝えられますが確かではありません。以降、宗拙は職についていた様子はなく、愚息を貫いて父より早くこの世を去ってしまいます。慶安 4 年(1651)宗旦 74 歳のときです。(以上、基本史料『元伯宗旦文書』不審庵蔵)

宗拙がなぜ職を辞したのかは伝わっていません。思想信条によるものなのでしょうか。何らかの身体的精神的障害があったのでしょうか。

ことによると医療・福祉の充実した世であれば彼の活躍の場はあったのかもしれない。

宗旦作の茶杓『弱法師』はいつ頃の作なのかわかっていません。書付の書体により特定するしかないでしょうが推測の域を出ないでしょう。

言うまでもなく、この銘は宗拙を意識して付けられたとは限りません。しかし、華奢な茶杓の姿に弱法師の姿を思い浮かべたとき、俊徳丸勘当の悲劇は謡曲を越えて息子宗拙を思い起こさざるを得なかったのではないのでしょうか。

『弱法師』という銘に、誰にも打ち明けられない宗旦の苦悩が秘められていると思えてなりません。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~